日本医史学雑誌第三十六巻第三号
平成二年七月三十日発行　平成元年八月十四日受付

明治初期東京大学医学部卒業生動静一覧（二）

小関恒雄

前報（本誌三三巻三号）[一]に続き、本稿では東京大学医学部の明治十四～十七年（一八八一～一八八四）の卒業生を取り上げる。前報に倣って、年度毎に一覧表にまとめた。

一　明治十四年卒業

この組は森鷗外のクラス[二～四]ということで有名、かつ、よく調べられている。卒業式（というより学位授与式）は七月九日に行われた。

式の詳細な記録を見出せないので短い記事を拾っておく。「去る九日一ツ橋通り東京大学三学部に於て卒業学生の学位授与式を行はれたる概況を挙くれば午後七時予て招待ありし伏見宮北白川宮を始め凡そ百余名の貴紳と卒業生徒は一同講義室に入て着席し先つ綜理（ママ）加藤弘之君が卒業学生に順次学位記を授与せられ了て演説あり学生一名総代として謝辞を述べ次に法学部鳩山和夫文学部ホートン理学部菊地（ママ）大麓医学部ベルツの諸君交ゝ演説され終りに福岡文部卿祝辞を述へらる其間時々奏楽あり十時頃式全く畢り別室に於て立食の饗応ありたり」（『東京医事新誌』一七二号一八八一）。

入沢は言う。[五]「明治十四年七月に、東京大学に卒業式がありました。是は一ツ橋の大学の講堂で挙行されましたが、此

醫學士ノ分

東京府平民　三浦　守治　二十四年五ヶ月
石川縣士族　高橋　順太郎　二十五年五ヶ月
高知縣士族　中濱　東一郎　二十四年

千葉縣士族　伊部　彝　二十五年五ヶ月
千葉縣士族　佐藤　佐　二十四年七ヶ月
長野縣士族　片山　芳林　二十六年七ヶ月
新潟縣平民　甲野　裳　二十五年七ヶ月
東京府士族　森　林太郎　十九年八ヶ月
山形縣士族　小池　正直　二十六年七ヶ月
秋田縣平民　熊谷　幸之助　二十三年八ヶ月
山口縣平民　山縣　直吉　三十一年七ヶ月
福井縣士族　山形　仲藝　二十三年九ヶ月
長崎縣士族　森永　友健　三十二年六ヶ月
靜岡縣平民　猪原　吉郎　二十三年五ヶ月
東京府士族　佐野　龍太郎　二十三年八ヶ月
宮城縣士族　奈良坂源一郎　二十七年二ヶ月
長崎縣士族　菊池　常三郎　二十六年
京都府平民　新宮　凉亭　二十七年一ヶ月

東京府士族　神保　文師　二十六年四ヶ月
東京府士族　谷口　譲　二十五年八ヶ月
千葉縣士族　賀古　鶴所　二十五年五ヶ月
長野縣士族　中村　正迢　二十三年八ヶ月
東京府平民　根木　與七郎　二十五年二ヶ月
福井縣士族　魚住　以作　二十八年六ヶ月
愛媛縣平民　長町　耕平　二十五年
栃木縣士族　江口　寛　二十七年五ヶ月
千葉縣平民　飯田　信順　二十五年一ヶ月
長崎縣士族　島田　完吾　二十三年

図1　『文部省報告』第四号（明治14年8月19日発行）「明治十四年七月東京大学ニ於テ学位ヲ授与セシ人名」

卒業式は大学医学部と大学三学部が合して東京大学となり、一つの総理の下に統轄されてから、始めての卒業式でありまして、宮様が始めて御台臨になり、三条公始め大官が皆列席されました。私は医学部の予科生徒であつて入場を許されました。此時の卒業生は法学部では加藤高明、鈴木充美氏等の級でありまして、医学部では、三浦守治、高橋順太郎、森林太郎、小池正直等の人々が前年の十一月に卒業されて、此時一緒に卒業式が挙げられたのであります。此卒業式で、法学部の講師鳩山和夫氏が一場の演説をされました。」

この時学位（法学士、理学士、医学士、製薬士、文学士）を授与された者（計六九名）のうち、医学士二八名の名簿を挙げておく（**図1**）。ただし本名簿はしばしば引用される『文部省公報』（著者未見）ではなく『文部省報告』掲載のものである。また、例のごとく医学士（卒業生）を一覧図示したが、前報同様[一]『卒業生氏名録』に従ったので、十四年卒は三〇名となっている（**図2**）。すなわち、学位授与が翌十五年（**図3**）に廻された及川、鹿島の二名が加わっているからである。彼らの初任先は鈴木[六]も参照した

が、必ずしもそれに従っていない。十五～十七年卒[六]についても同様である。

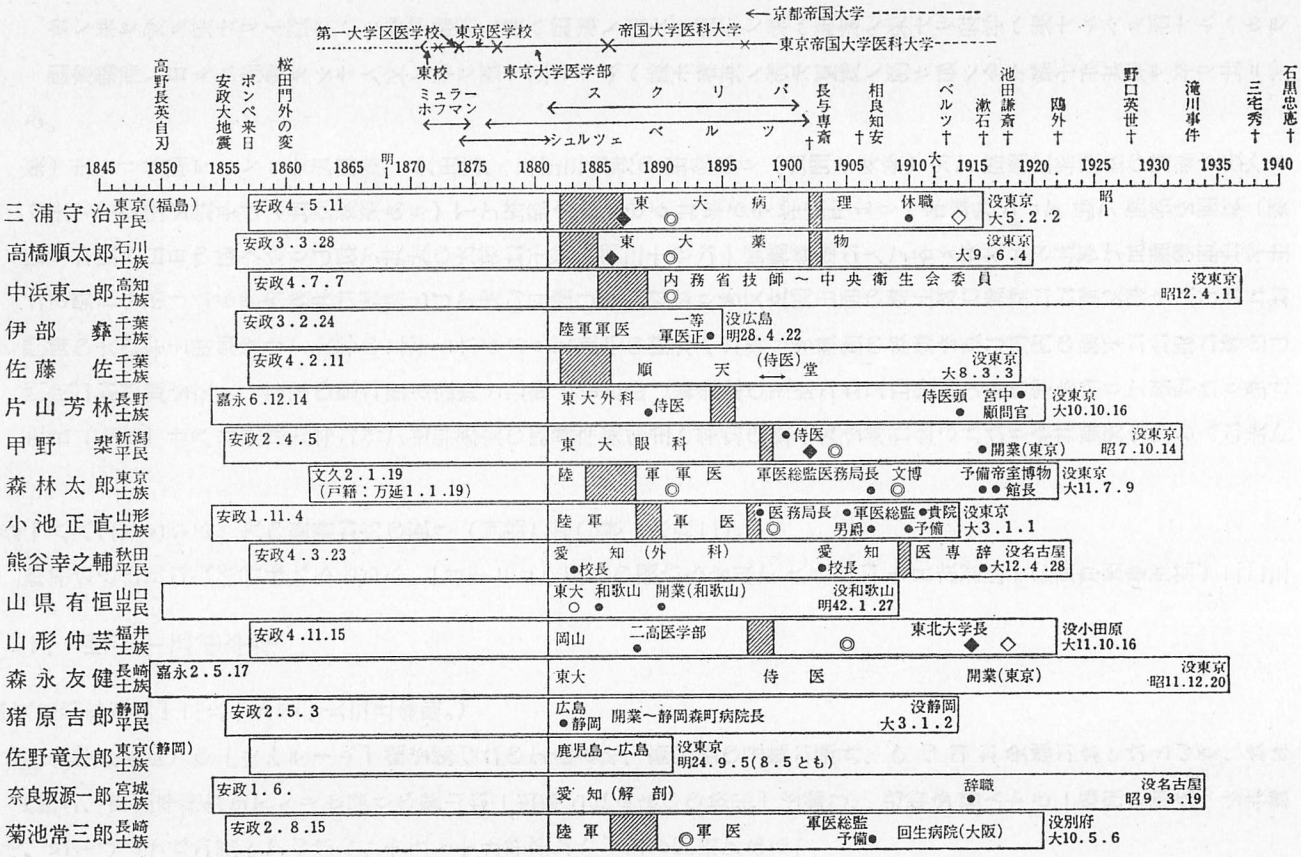
（因に、前述卒業式でアメリカ帰りの鳩山は「法律と云ふものの効用」を論じ、法律を軽んずる「政府の所為」を非難し、大学（学問）の「リベラール」論を説いたのであるが、高官達の忌諱に触れ、ついには免職になったという。[五]なお『東京医事新誌』二九一七号一九三五参照。）

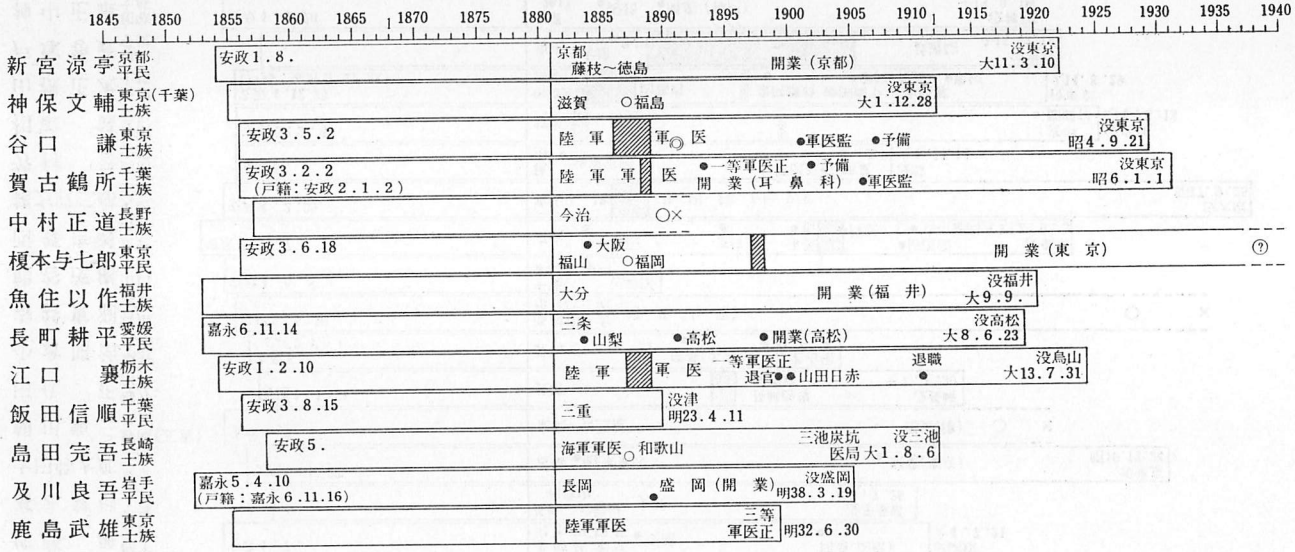
二　明治十五年卒業

例年なら七月に式が行われるところ、「目下コレラ流行の際なるを以て九月或は十月迄延期」（『東京医事新誌』二二三号一八八二）となる。式の模様は次の通り（同誌二四〇号一八八二）。

去月〔十月〕廿八日東京大学に於て法理医文の四科卒業学生へ学位の授与式を執行せられたり今其概況を記さんに先づ門前には旭旗を交叉し其室の窓に至る迄旗と紅燈とを点綴し講義堂の正面には又紅燈にて學の字を作りて掲げたり是れ門前の大の字と相映対して大学の二字となるなり又庭中の樹木へは夥しき無慮の球燈を点じ校内の廊下には別に彩色したる提灯を吊したる等内外共に燦然として実に目醒しき有様なりき又玄関正面の楼上及び講堂には電気燈を点じたれば辺りは宛ら白日の如くなりし扨て其式の次第は午後五時三十分に一同講義室に入て各ゝ着牀せられ尋で加藤総理は学生へ夫ゝ学位記を授与し（此時奏楽あり）了て祝辞を述べらる其畢るや学生中より一名総代として起て謝辞を陳ぶ（奏楽）夫より教師フェノロサ氏穂積、矢田部、三宅三教授の祝辞あり（此間各奏楽）次て福岡文部卿左の祝辞を述べらる。

国家維新ノ日タル尚浅クシテ人文ノ年ヲ逐テ盛ニナルハ猶ホ春英ノ秀テ夏雲ノ湧ガ如シ今ヤ諸子亦其業ヲ卒リ此ニ学位ノ栄ヲ受ク美ナリト謂フヘシ嗚呼諸子ノ美ハ国家ノ美ナリ諸子ノ栄ハ国家ノ栄ナリ抑学ハ実ナルヘク浮ナルヘカラ


京都帝国大学
第一大学区医学校、東京医学校
帝国大学医科大学
東京帝国大学医科大学
高野長英自刃
安政大地震
ポンペ来日
桜田門外の変
東校
東京大学医学部
ミュラー
ホフマン
スクリバ
シュルツェ
ベルツ
長与専斎
相良知安
ベルツ
漱石
池田謙斎
鴎外
野口英世
滝川事件
三宅秀
石黒忠悳
1845 1850 1855 1860 1865 明1 1870 1875 1880 1885 1890 1895 1900 1905 1910 大1 1915 1920 1925 昭1 1930 1935 1940
三浦守治 東京平民(福島)
安政4.5.11
東大病
理
休職
没東京 大5.2.2
高橋順太郎 石川士族
安政3.3.28
東大薬
物
没東京 大9.6.4
中浜東一郎 高知士族
安政4.7.7
内務省技師～中央衛生会委員
没東京 昭12.4.11
伊部彝 千葉士族
安政3.2.24
陸軍軍医 一等軍医正
没広島 明28.4.22
佐藤佐 千葉士族
安政4.2.11
順天 (侍医)堂
没東京 大8.3.3
片山芳林 長野士族
嘉永6.12.14
東大外科 侍医
侍医頭 宮中顧問官
没東京 大10.10.16
甲野棐 新潟平民
安政2.4.5
東大眼科 侍医
開業(東京)
没東京 昭7.10.14
森林太郎 東京士族
文久2.1.19 (戸籍：万延1.1.19)
陸軍軍医 軍医総監医務局長 文博 予備帝室博物館長
没東京 大11.7.9
小池正直 山形士族
安政1.11.4
陸軍 軍医 医務局長 軍医総監 貴院 男爵 予備
没東京 大3.1.1
熊谷幸之輔 秋田平民
安政4.3.23
愛知(外科) 校長
愛知 校長
医専辞 没名古屋 大12.4.28
山県有恒 山口平民
東大 和歌山 開業(和歌山)
没和歌山 明42.1.27
山形仲芸 福井士族
安政4.11.15
岡山 二高医学部
東北大学長
没小田原 大11.10.16
森永友健 長崎士族
嘉永2.5.17
東大 侍医
開業(東京)
没東京 昭11.12.20
猪原吉郎 静岡平民
安政2.5.3
広島 静岡 開業～静岡森町病院長
没静岡 大3.1.2
佐野竜太郎 東京(静岡)士族
鹿児島～広島
没東京 明24.9.5(8.5とも)
奈良坂源一郎 宮城士族
安政1.6.
愛知(解剖)
辞職
没名古屋 昭9.3.19
菊池常三郎 長崎士族
安政2.8.15
陸軍 軍医
軍医総監 予備 回生病院(大阪)
没別府 大10.5.6



〈注〉府県・都市名は各府県病院（医学校）を示す。殆どは院長・校長（格）。明治21年限り所謂県立医学校廃止（岡山，千葉，石川，大阪，京都等は医学校存続）。
◆任教授　◎医学博士　◇名誉教授　●発令異動等起年　○当時現役（役職）　○当時生存　×既に死去　斜線は留学，短期のものは視察派遣学会出席回航等。生年で月日不明の場合，旧暦を西暦に直すと旧暦（11月～）12月は次の西暦年となる。例えば明治14年卒島田完吾（安政5年生れ）はもし旧暦11月28日以降の生れなら西暦1859年生れとなる。こういう場合，年の大部分を占める1858年にあてはめた。生年月日記載なきものは卒業時年齢享年等からの逆算推定。

図 2　明治14年（1881）卒業生

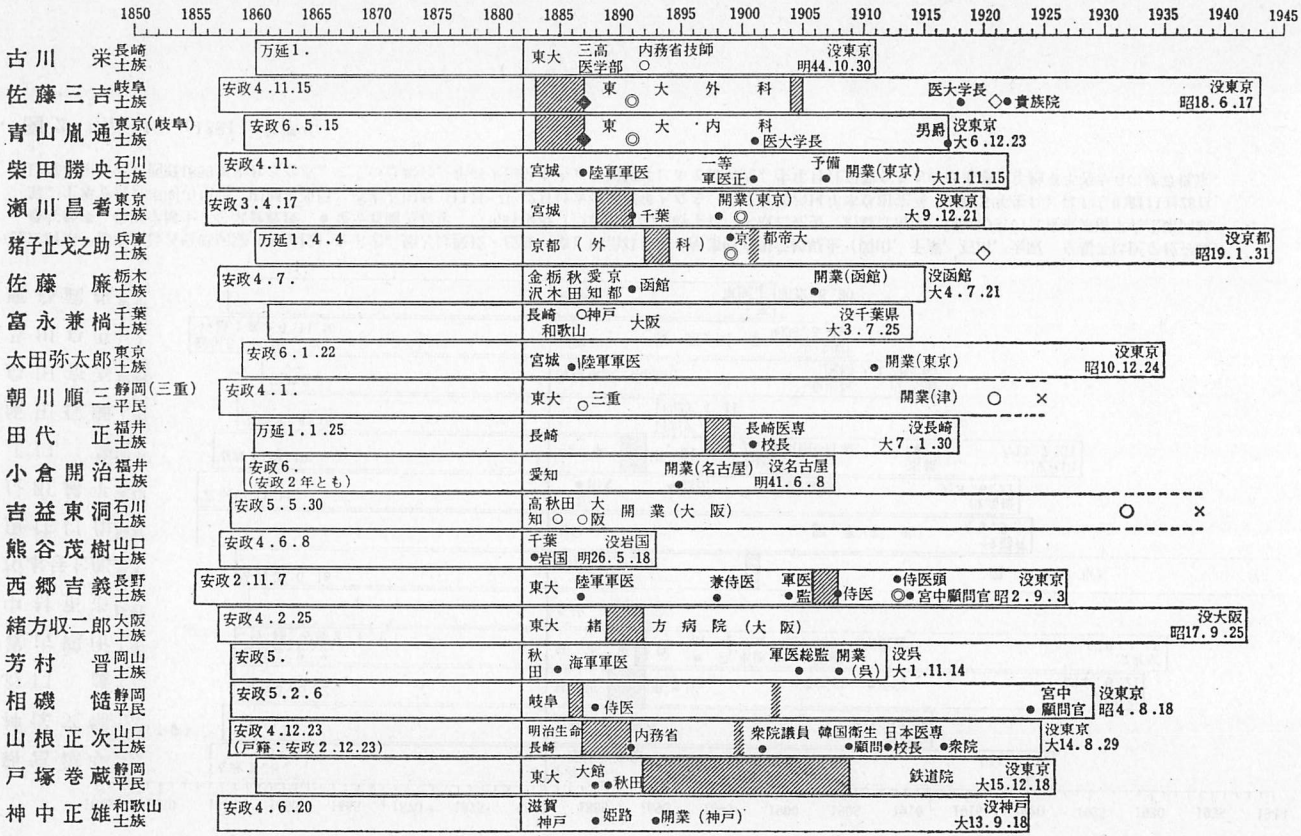

1850 1855 1860 1865 1870 1875 1880 1885 1890 1895 1900 1905 1910 1915 1920 1925 1930 1935 1940 1945
古川 栄 長崎 士族
万延1.
東大 三高 医学部 内務省技師 ○ 没東京 明44.10.30
佐藤三吉 岐阜 士族
安政4.11.15
東 ◎ 大 外 科
医大学長 ● ◇● 貴族院 没東京 昭18.6.17
青山胤通 東京(岐阜) 士族
安政6.5.15
東 ◎ 大 内 科 ● 医大学長 男爵 没東京 ●大6.12.23
柴田勝央 石川 士族
安政4.11.
宮城 ●陸軍軍医 一等 軍医正 ● 予備 ● 開業(東京) 大11.11.15
瀬川昌耆 東京 士族
安政3.4.17
宮城 千葉 ● 開業(東京) ◎ 没東京 大9.12.21
猪子止戈之助 兵庫 士族
万延1.4.4
京都 (外 科) ●京 ◎ 都帝大 ◇ 没京都 昭19.1.31
佐藤 廉 栃木 士族
安政4.7.
金沢 栃木 秋田 愛知 京都 ●函館 開業(函館) ● 没函館 大4.7.21
富永兼楠 千葉 士族
長崎 ○神戸 和歌山 大阪 没千葉県 大3.7.25
太田弥太郎 東京 士族
安政6.1.22
宮城 ●陸軍軍医 ● 開業(東京) 没東京 昭10.12.24
朝川順三 静岡(三重) 平民
安政4.1.
東大 ○三重 開業(津) ○ ×
田代 正 福井 士族
万延1.1.25
長崎 長崎医専 ●校長 没長崎 大7.1.30
小倉開治 福井 士族
安政6.
(安政2年とも)
愛知 開業(名古屋) ● 没名古屋 明41.6.8
吉益東洞 石川 士族
安政5.5.30
高知 ○ 秋田 ○ 大阪 開 業 (大 阪) ○ ×
熊谷茂樹 山口 士族
安政4.6.8
千葉 ●岩国 没岩国 明26.5.18
西郷吉義 長野 士族
安政2.11.7
東大 陸軍軍医 ● 兼侍医 ● 軍医監 侍医 ●侍医頭 ◎● 宮中顧問官 没東京 昭2.9.3
緒方収二郎 大阪 士族
安政4.2.25
東大 緒 方 病 院 (大 阪) 没大阪 昭17.9.25
芳村 晋 岡山 士族
安政5.
秋田 ● 海軍軍医 軍医総監 ● 開業 ● (呉) 没呉 大1.11.14
相磯 慥 静岡 平民
安政5.2.6
岐阜 侍医 宮中 ● 顧問官 没東京 昭4.8.18
山根正次 山口 士族
安政4.12.23
(戸籍:安政2.12.23)
明治生命 長崎 内務省 衆院議員 ● 韓国衛生 ●顧問 日本医専 ●校長 ●衆院 没東京 大14.8.29
戸塚巻蔵 静岡 平民
東大 大館 ●秋田 鉄道院 没東京 大15.12.18
神中正雄 和歌山 士族
安政4.6.20
滋賀 神戸 ●姫路 ●開業(神戸) 没神戸 大13.9.18

図3 明治15年（1882）卒業生

ス唯其レ實ナリ故ニ己レヲ失ハス唯其レ深シ故ニ物ニ応シテ究マラス諸子ノ学ニ於ケル業已ニ基礎アリ渕源アリ予固ヨリ其必ス浮浅ノ弊ナキヲ信ス顧フニ諸子ハ将ニ重キニ任シ遠キヲ致サントスルモノ実ニ今日ヲ以テ其始トス諸子其レ益勉テ怠ラサルヘシ而シテ其実ナルモノ愈実ニ其深キモノ愈深ク以テ能ク其志ヲ達シ其業ヲ遂ルハ期シテ待ツヘシ

於是乎国家ノ美タリ国家ノ栄タル果シテ之ヲ証スルニ足ラン因テ諸子ノ栄ヲ祝シ併テ予カ諸子ニ望ム所ヲ告ク

右にて式全く畢る此日学位記を受けられたるは法学士八名理学士各科合せて二十名医学士廿九名即チ岩手県及川良吾東京府鹿島武雄神奈川県阪本常長長崎県高木文種岐阜県野川次郎長崎県古川栄岐阜県佐藤三吉〔略〕京都府吉田興三同府斎藤仙也製薬士五名〔略〕其他文学士四名なり是より臨場の方々を別室に請じ夜会を開かれたり其方々には貞愛親王、能久親王、三条太政大臣、山形〔有朋〕参事院議長、西郷農商務卿、井上〔馨〕外務卿、佐々木工部卿、佐野元老院議長、英国公使、伊国公使、清国公使、朝鮮公使、其他大鳥、西、箕作、神田、玉乃、芳川、樺山、松本、戸塚、諸君にて総員凡そ二百四五十名なりき実に頗ふる盛大なる事にてありし

「祝辞」等のうち福岡孝弟、加藤弘之、穂積陳重の分は『学芸志林』六十四冊（一八八二）に、矢田部良吉、フェノロサの分は同誌六十五冊（一八八二）に、三宅秀の分は同じく六十六冊（一八八三）に載っている。うち三宅は、当時なお、ややもすれば医が「賤業視」されるのは「誣ヒテ薬価ヲ高貴ニシ或ハ無益ニ湯散丸円等ノ数剤ヲ複用シ」、「患者不幸ニシテ死スルトキハ毎ニ之ヲ天命ニ帰シ」疾病の由来や治方を推究しないからで、当然「世人ヲシテ医ヲ目シテ薬売ト曰ハシムルニ至ル」。かかる汚名を雪ぐには「古来医ノ兼業ト為セル調薬ノ術ヲ割キテ〔略〕今ヤ製薬士ニ調剤ノ事ヲ委ネ医ハ単ニ病者ヲ診察シ施療ノ法ヲ授ケテ自ラ薬剤ヲ投スルヲ止メ而シテ以テ純潔敦厚ノ志」を示して、はじめて「薬売視」を免れられると説く。そして、「法律政治」「工業理財」を司る「法理文学士ノ諸君」が「医学ノ賤業ニ非サルヲ信セラレ」「医学社会ニ一臂ノ力ヲ仮与セラレン」ことを請うている。

三　明治十六年卒業

この年七月『官報』が創刊され、以降卒業生名簿が紙上に載るようになる。第九十三号（十月十八日）に広告が載っている。すなわち、「〇広告　本月廿七日（土曜日）午後二時ヲ以テ前学年卒業ノ学生ヘ学位授与ノ典挙行可致ニ付現今在京セル従前本学卒業ノ法理医文学及製薬ノ諸学士中右臨場望ノ向ハ来ル廿四日迄ニ本学庶務課ヘ申出ツヘシ此旨広告候事　明治十六年十月　東京大学」「〇前学年東京大学卒業ノ学生中目下各地方ニ在ルモノヘ告知ス　本月廿七日（土曜日）午後二時ヨリ前学年卒業ノ学生ヘ学位授与ノ典挙行ノ儀既ニ各ヘ相達置候通ニ付都合出来候ハ、可成上京出頭スヘシ　明治十六年十月　東京大学」と。

また、式の模様は次の通り（『官報』一〇二号、十月二十九日）。

〇東京大学学位授与式（文部省報告）　一昨廿七日午後二時東京大学ニ於テ学位授与式ヲ行ヒ総理ノ招待ニ由リ当日臨場セル者ハ佐々木工部卿九鬼文部少輔樺山警視総監及米国特命全権公使ジョン、エ、ビンガム清国特命全権公使黎

庶昌独逸国特命全権公使グラーフ、フオンデーンホッフ露国特命全権公使ダウイドフ伊国代理公使シ、エ、マルタンランチャレス等無慮二百余名アリ其ノ授与式次第左ノ如シ

以下に当日の式次第（北里研究所提供）を掲げる。字句に若干の異同はあるものの、もちろん、上掲『官報』に前文に続けて再録されている。

十月二十七日（土曜日）

○東京大学学位授与式次第

○午後一時五十分一同講義室ニ入テ各着床ス

○奏楽

○東京大学総理加藤弘之卒業学生ニ学位記ヲ授与シ了リテ祝辞ヲ述フ

○新学士一名〔鶴原定吉〕総代トシテ謝辞ヲ述フ

○奏楽

○東京大学法学部講師栗塚省吾祝辞ヲ述フ

○奏楽

○東京大学医学部教師スクリバ祝辞ヲ述フ

○奏楽

○文部卿福岡孝弟〔代理九鬼隆一文部少輔〕祝辞ヲ述フ

○奏楽

畢（別席ニ於テ酒菓ヲ供ス）

川俣四男也醫學科ヲ修メ定
期ヲ歷テ其業ヲ卒ヘ考試咸完
シ乃予カ掌ル所ノ權ニ據リ授
クルニ醫學士ノ位ヲ以テス爾
後優待令名ノ此位ニ屬セル者
ハ永ク汝ノ享有ニ歸セン因テ
東京大學ノ印ヲ鈐シ予ノ名ヲ
署シテ以テ之ヲ證ス
明治十六年十月廿七日 東京大學總理正五位勲三等加藤弘之
東京大學總理加藤弘之ノ申稟ヲ
領シ證スルニ予ノ名ヲ以テス
文部卿正四位勲一等福岡孝弟

図4　明治16年「学位記」

各学部教授ニ祝辞演述ヲ託スベキ処之カ為メ数時間ヲ費スノ恐アルヲ以テ已ムヲ得ス本年ハ法医二学部各一名ニ託スルコトトセリ

△学位授与人名

法学士ノ分

〔略〕

医学士ノ分

医学科

兵庫県士族　河本重次郎〔略〕福井県士族　黒柳精一郎

製薬学科

山口県士族　蔵田忠介

〔略〕

明治十六年十月廿七日　東京大学

授与式が終ったのは午後三時三〇分である。その時の「学位記」（川俣四男也）を図4に掲げておく。（なお当日の「祝辞」のうち九鬼、加藤、栗塚の分および文学士鶴原の「謝辞」の記事は『学芸志林』七六冊一八八三参照。）

ちなみに、この年から式が昼間に変更された。従来卒業

生と在学生とが式後に別れを惜んで夜間飲み騒ぐ無礼講を封ずるためと取った三学部の学生たちが、このため いわゆる「明治十六年事件」(七)なる騒動を起すが、式そのものは予定通り行われたという。この事件には本郷の医学生達が加わらなかったためか、(七)医史ではあまり扱っていない。

図5に卒業生二六名を一覧する。

四　明治十七年卒業

図6に卒業生を一覧する。また、式の模様を『官報』四〇〇号（十月二十七日）から引用する。

この年、法・文学部は本郷に移転する。

○東京大学学位授与式（文部省報告）　本郷東京大学法文学部ニ於テ一昨廿五日午前十時三十分法理医文四学部前学年卒業学生ノ学位授与式ヲ挙行セリ当日二品熾仁親王ノ臨場アリ此ノ他松方川村ノ二参議福岡文部卿森文部省御用掛及文部省並ニ東京大学同省直轄各学校諸職員等列席アリ其ノ学位記及之ヲ授与セル人名ハ左ノ如シ

学位記

何某何学科ヲ修メ定期ヲ歴テ其業ヲ卒ヘ考試咸完シ乃予カ掌ル所ノ権ニ拠リ授クルニ何学士ノ位ヲ以テス爾後優待令名ノ此位ニ属セル者ハ永ク汝ノ享有ニ帰セン因テ東京大学ノ印ヲ鈐シ予ノ名ヲ署シテ以テ之ヲ証ス

明治十七年十月廿五日　　東京大学総理正五位勲三等加藤弘之印

東京大学総理加藤弘之ノ申稟ヲ領シ証スルニ予ノ名ヲ以テス

文部卿正四位勲一等子爵福岡孝弟印

学士姓名

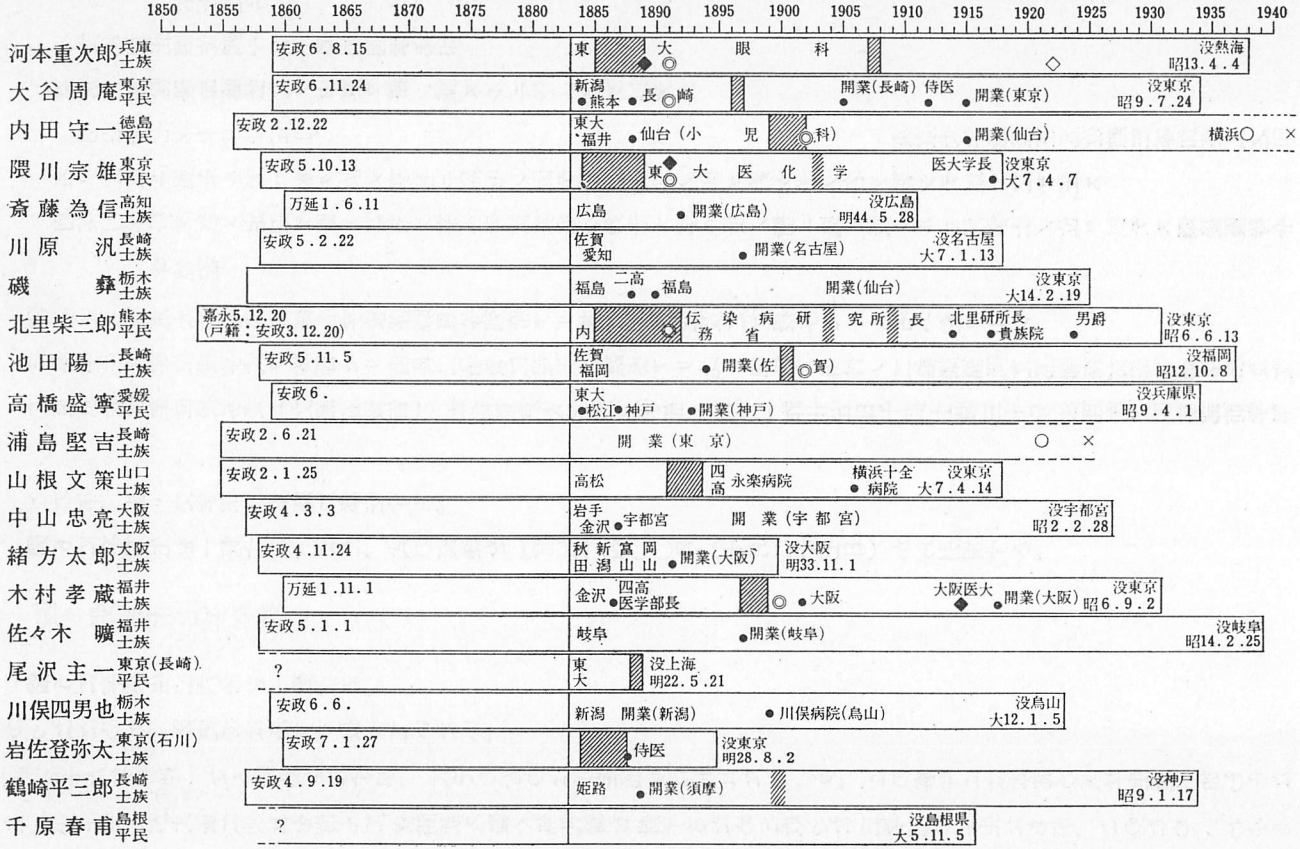

1850 1855 1860 1865 1870 1875 1880 1885 1890 1895 1900 1905 1910 1915 1920 1925 1930 1935 1940
河本重次郎 兵庫士族 安政6.8.15 東 大 眼 科 没熱海 昭13.4.4
大谷周庵 東京平民 安政6.11.24 新潟 熊本 長 崎 開業(長崎) 侍医 開業(東京) 没東京 昭9.7.24
内田守一 徳島平民 安政2.12.22 東大 福井 仙台(小 児 科) 開業(仙台) 横浜○ ×
隈川宗雄 東京平民 安政5.10.13 東 大 医 化 学 医大学長 没東京 大7.4.7
斎藤為信 高知士族 万延1.6.11 広島 開業(広島) 没広島 明44.5.28
川原 汎 長崎士族 安政5.2.22 佐賀 愛知 開業(名古屋) 没名古屋 大7.1.13
磯 彝 栃木士族 福島 二高 福島 開業(仙台) 没東京 大14.2.19
北里柴三郎 熊本平民 嘉永5.12.20 (戸籍:安政3.12.20) 内 伝 染 病 研 究 所 長 北里研所長 男爵 貴族院 没東京 昭6.6.13
池田陽一 長崎士族 安政5.11.5 佐賀 福岡 開業(佐 賀) 没福岡 昭12.10.8
高橋盛寧 愛媛平民 安政6. 東大 松江 神戸 開業(神戸) 没兵庫県 昭9.4.1
浦島堅吉 長崎士族 安政2.6.21 開 業(東 京) ○ ×
山根文策 山口士族 安政2.1.25 高松 四高 永楽病院 横浜十全病院 没東京 大7.4.14
中山忠亮 大阪士族 安政4.3.3 岩手 金沢 宇都宮 開 業(宇 都 宮) 没宇都宮 昭2.2.28
緒方太郎 大阪士族 安政4.11.24 秋田 新潟 富山 岡山 開業(大阪) 没大阪 明33.11.1
木村孝蔵 福井士族 万延1.11.1 金沢 四高 医学部長 大阪 大阪医大 開業(大阪) 没東京 昭6.9.2
佐々木 曠 福井士族 安政5.1.1 岐阜 開業(岐阜) 没岐阜 昭14.2.25
尾沢主一 東京(長崎)平民 ? 東 大 没上海 明22.5.21
川俣四男也 栃木士族 安政6.6. 新潟 開業(新潟) 川俣病院(烏山) 没烏山 大12.1.5
岩佐登弥太 東京(石川)士族 安政7.1.27 侍医 没東京 明28.8.2
鶴崎平三郎 長崎士族 安政4.9.19 姫路 開業(須摩) 没神戸 昭9.1.17
千原春甫 島根平民 ? 没島根県 大5.11.5

図 5 明治16年（1883）卒業生

〔略〕

医学士ノ分

医学科

福島県士族　村田鎌太郎〔略〕埼玉県平民　山本次郎平

〔略〕

又当日加藤総理演説アリ其ノ要略左ノ如シ

謹ミテ　親王殿下並ニ内外貴紳諸君ニ白ス本日ハ我カ東京大学第六回ノ学位授与式ニシテ本学ニ於テ一歳中最祝スヘク最賀スヘキノ日トス此ノ最祝賀スヘキノ日ニ際シ例ニヨリ　親王殿下ノ親臨並ニ貴紳諸君ノ来臨ヲ辱クセシハ我カ東京大学ニ於テ最光栄トスル所ナリ謹ミテ謝ス

更ニ謹ミテ　親王殿下並ニ貴紳諸君ニ白ス今日学位ヲ受クル所ノ学生ハ皆博学多識ナル諸教官ノ薫陶ヲ享ケ数年間勉励ト堅忍トニ於テ衆ニ超絶シ以テ今日ノ光栄ヲ得ルニ至レル者ニシテ皆将来大ニ属望スヘキハ小官カ固ク信シテ敢テ疑ハサル所ナリ

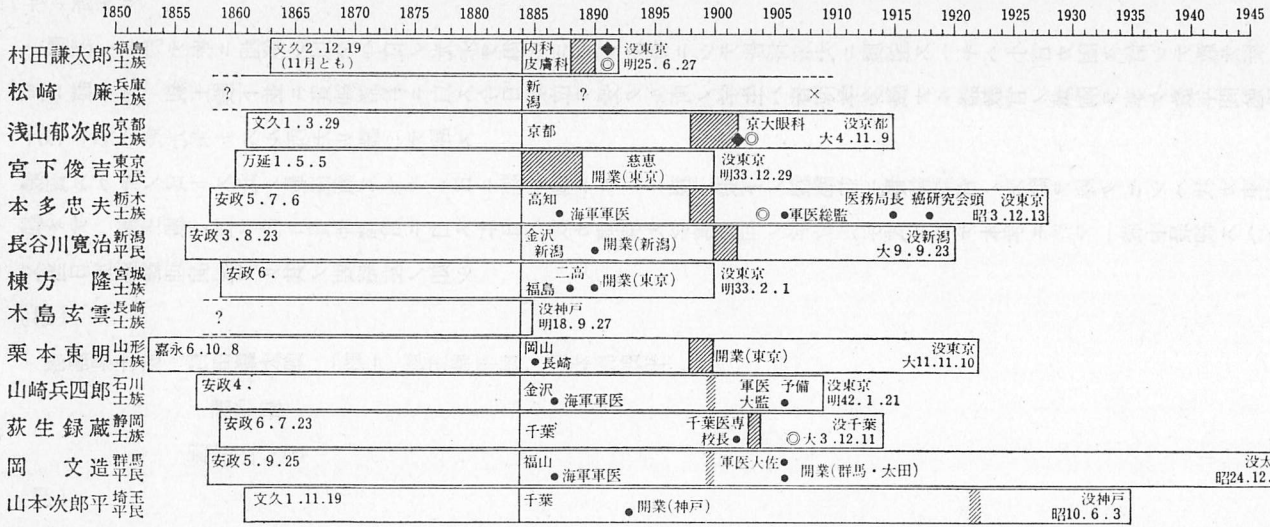


図 6 明治17年 (1884) 卒業生

乍序更ニ白ス今日此ノ盛典ヲ挙行スル所ノ此ノ法文学部タルヤ本来一橋外ニアリテ理学部ト相合セルモノナリシカ此ノ一橋外ノ校舎タル明治六年ノ新築ニシテ既ニ数年ヲ経タルヲ以テ破壊スル箇処モ少カラス加之高等教育ノ規模漸ク盛大トナルニ随ヒ校舎狭隘ニシテ教場実験場漸ク不足ヲ告クルニ至リ如何トモスヘカラサルヲ以テ明治十三年ニ於テ此ノ法文両学部ノ新築ニ決シ直ニ着手シテ今年八月ニ至リ全ク竣功シタリ〔略〕此ノ新築ニ費ス所ノ総額拾壱万百七拾円三拾三銭九厘ナリキ〔略〕今日此ノ新校ニ於テ学位授与ノ式ヲ挙行スルコトトナリシハ最嘉フヘキコトト云ハサルヘカラサ

ルナリ

更ニ一言以テ今日学位ヲ受ケタル学生諸子ヲ祝シ併セテ忠告スル所アラントス諸子ハ数年間勉励ト堅忍トニヨリテ衆ニ超絶シ以テ今日ノ光栄ヲ得ルニ至リタリ然レトモ今日ノ光栄ハ未以テ諸子カ真ノ光栄トスルニ足ラス諸子真ノ光栄ヲ求メント欲セハ猶今日ノ志ヲ失ハス更ニ勉励ト堅忍トノ二術ニヨリテ諸子カ頭髪霜ヲ戴クノ日ヲ期スヘキノミ

なお、文部卿福岡孝弟と総理加藤弘之の祝辞、および総代の文学士江木衷の謝辞は、同じく『学芸志林』第八十八冊（一八八四）に載っている。

五　明治十二年当時の生徒進級状況

ここに明治十二年四月調査の医学部在籍生徒一覧表[八]がある（図7）。初の医学部卒業者を出し、学位授与を控え、今後の「医学士」量産に一応のめどが立った時期といえようか。表中「卒業生」とは、いわゆる明治十二年卒（一八名と神内、半井[一]）と川上清哉、外山林助の合計二二名のことである。うち川上は退学し（ただし明治十五年医術開業試験合格）、外山は次年度卒となる。「一等」とはいわゆる十三年卒、「五等」は十七年卒のことである。ただし、実際の卒業生数はそれぞれ一七（一九）名、三〇（二八）名、二七（二九）名、二六名、一三名だから、本科に進んでからでもかなりの落第、中退、病死者がいることになる。たとえば、十二年卒（本表の「卒業生」）は明治三年入学時は四四名、十三年卒（「一等」）は同

東京大學醫學部生徒一覽表

科目	等級	人員	入學月日	卒業月日
醫學本科	卒業生	二十二	明治三年十一月	明治十一年十一月
同	一等	二十五	同 四年十一月	同 十二年十一月
同	二等	三十	同 五年十一月	同 十三年十一月
同	三等	二十六	同 六年十一月	同 十四年十一月
同	四等	三十一	同 七年十一月	同 十五年十一月
同	五等	二十七	同 八年十一月	同 十六年十一月

図 7　明治12年4月現在医学本科生一覧

四年入学時七三名だったというから、[八] 前者は半減、後者は約三分の一に減っていることになる。その原因は予科が五年と長く、「本人の都合、規則違反等のほか、進級の可否を決する学期試業の厳格さ」、それにせっかく予科を卒業しても本科に進まない、などである。[七]

六　各人履歴典拠

前報[一]に準じ各人資料典拠の一部を挙げる。

伊部（『東京医事新誌』八九一号一八九五、三〇四八号一九三七、『大日本人名辞書』一九〇九）、佐藤（『順天堂医事研究会誌』五五六号一九一九、『順天堂史』上巻一九八〇）、片山（『東京医事新誌』三〇〇六号一九三六、『更級郡埴科郡人名辞書』一九三九）、熊谷（『鶴天学友会会報』五七号一九二三、『新編愛知県医人伝』一九三四、熊谷義一氏私信）、山県（『和歌山新報』一九〇九・二・二）、猪原（土屋重朗『静岡県の医史と医家伝』一九七三、『静岡民友新聞』一九一四・一・五）[三]、谷口（小関恒雄『日医事新報』三〇三七、三〇三八、三〇七〇号一九八二～八三、松木明知『麻酔科学のパイオニアたち』一九八三）、森永（『現代人名辞典』一九一二、『東京医事新誌』三〇一三号一九三六）、榎本（篠原正一『久留米人物誌』一九八一）、奈良坂（『鶴天学友会報』六号一九三四）、新宮（山本四郎『新宮涼亭伝』一九六八、大島・八角一九八五）[二]、神保（川口・土橋一九八七）[一]、高橋健一氏私信）、賀古（岡田和一郎『耳鼻咽喉科』四巻四号一九三一、沢井清『国文学解釈と鑑賞』六二八号一九八四、大島・八角一九八四）[二]、魚住（『医事公論』四〇二号一九二〇）、長町（『讃岐人名辞書』一九三六、『讃岐医師名鑑』一九三八）、江口（杉野大沢『日医事新報』一八〇五～八号一九五八、新実藤昭、同誌三一八二号一九八五、三二三三号一九八六）、飯田（『伊勢新聞』一八九〇・四・十四）、島田（『東京医事新誌』一七八一号一九一二）、及川（『厳手日報』一九〇五・三・二十一）[三]、『及川古志郎』一九八三、多田源孝、及川益夫両氏私信）、鹿島（浅井一九八六、川口・土橋一九八七）[四]。なお、鷗外による同級生『学友月旦』はよく知られる（『鷗外全集』三〇[三]

巻一九七四)。中村、榎本の没年は確認できないでいる。

古川(『東京医事新誌』一七三七号一九一一、大島・八角一九八八)[二]、柴田(『陸軍軍医学校五十年史』一九三六)、瀬川(瀬川昌者『茶の湯釜』一九三三、『東京医事新誌』三〇一三号一九三六)、佐藤廉(倉沢広吉『栃木県医襍録』一八九四、阿部竜夫『函館の医事と医人』一九五一、富永(『医海時報』一〇四九号一九一四)、太田(『医海時報』二一五八号一九三六)、朝川(『三重県衛生年報』明治二十二年版附録「医師姓名録」、『三重県紳士録』一九一五)、田代(『研瑤会雑誌』一三三〜七号一九一八、『長崎県人物伝』一九七三)、小倉(『中央医会誌』七六号一九〇七、八〇号一九〇八、『東京医事新誌』一五六八号一九〇八)、吉益(石田秀一『秋田医報』六八一号一九八二)、熊谷(大岡昇『岩国の文化と教育資料』一、一九七五)、緒方(緒方富雄『緒方洪庵伝』一九四二、『日医事新報』一〇四七号一九四二)、芳村(『医海時報』九六一号一九一二、『広島衛生医事月報』一六七号一九一二)、相磯(『医事公論』八九二号一九二九、相磯和嘉『医家芸術』三〇巻八号一九八六)、山根(井関九郎『現代防長人物史』一九一七、田中助一『山根正次伝』一九六七)、戸塚(石田秀一『秋田医報』六五八号一九八一、小関恒雄『犯罪誌』四八巻二号一九八二)、神中(『関西杏林名家集』第一輯一九〇九、『神戸市医師会沿革史』一九三七、神中博氏私信)、遠藤(『芸備医事』五九号一九〇一、『広島衛生医事月報』二七号一九〇一、土屋重朗氏私信)、斎藤(桜井敬太郎『京都府下人物誌』第一編一八九一、『医海時報』一三五七号一九二〇)。

なお、朝川、吉益、坂本らの晩年は詳細不明である。

内田(『徳島名鑑』一九一五、『〔徳島県〕三野町誌』一九七四)、斎藤(『広島衛生医事月報』一五〇号一九一一、『芸備医事』一八二号一九一一)、川原(高橋明『朝日新聞』名古屋本社版一九八八・八・五、『名大医学部学友時報』四六八号以降掲載中一九八九)、磯(『医海時報』一五九五号一九二五、『仙台人名辞書』一九三二)、池田(『関西医事』三五六号一九三七、『医事公論』一三一七号一九三七、迎俊彦、池田盟男両氏私信)、高橋(前掲『神戸市医師会沿革史』)、浦島(前掲『現代人名辞典』)、山根(前掲・井関一九一七、『医海時報』一二四三号一九一八、『横浜社会辞彙』一九一八)、中山(『日

本現今人名辞典』一九〇〇、高木政一郎『栃木県医士列伝』一九〇九）、緒方（『東京医事新誌』一一八三号一九〇〇）、木村（『〔金沢大学第一外科〕百年の歩み』寺畑喜朔分担一九八五）、佐々木（『濃飛人物と事業』一九一六、『関西医事』四二五号一九三九）、尾沢（河本重次郎『中外医事新報』一一八四号一九三二）、川俣（前掲・高木一九〇九、『新潟大学医学部五十年史』一九六二、川俣昭男氏私信）、岩佐（『中外医事新報』三七〇、三七一号一八九五、大島・八角一九八四）、鶴崎（井上門司『日医事新報』一五八九号一九五四）、劉（小松良夫『寝屋川市医師会前史』一九七七）、南（秋永常次郎『福島県医襍録』一八九五、『福島県医師会史』資料篇一九八一）、浅田（『〔金沢大学第一内科〕百年のあゆみ』寺畑喜朔分担一九八四、小山松勝一郎氏私信）、黒柳（前掲・寺畑一九八四）。なお、河本による同級生月旦（『回顧録』一九三六）参照。内田、浦島、浅田の晩年（没年）は詳でない。

村田（『中外医事新報』二九六号一八九二、『東京医事新誌』七四八、七五五号一八九二）、宮下（『東京医事新誌』一一八七号一九〇〇、三〇一一号一九三六）、長谷川（『新潟新聞』一九二〇・九・二十四、『北越医会誌』三五巻五号一九二〇）、棟方（前掲『仙台人名辞書』、棟方宏氏私信）、栗本（『東京医事新誌』二三〇五号一九二二、三〇一一号一九三六）、荻生（『〔千葉医専〕校友会誌』七〇号一九一五）、岡（黒丸五郎『岡治道先生と私』一九六八、岡（惺治氏私信）、山本（『京阪神ニ於ケル事業ト人物』一九一九、『兵庫医学』一巻二号一九三五、前掲『神戸市医師会沿革史』）。なお、松崎、木島の詳細は不明である。

文献

（一）小関恒雄「明治初期東京大学医学部卒業生動静一覧（一）」『日本医史学雑誌』三三巻、三一七～三二七頁、一九八七。

（二）大島田人、八角真「森鷗外―人と文学のふるさと―㈦～㈠、㈡」『明治大学教養論集』一五六号八七～二四〇頁、一九八二、一六五号三九～一六八頁、一九八三、一七二号八一～一五四頁、一九八四、一七九号二三一～三六一頁、一九八五、二一三号九五～一九二頁、一九八八。

（三）川口修一郎、土橋庸介「森鷗外―人と文学―」『〔明治大学商学部〕商学教養セミナー』一八集、一八九～二二二頁、一九八七。
（四）浅井卓夫『軍医鷗外森林太郎の生涯』教育出版センター、一九八六。
（五）入沢達吉『随筆楓荻集』岩波書店、一九三六。
（六）鈴木要吾「明治十年前後の日本医学界（人）」『東京医事新誌』二九七三号、七一～八三頁、一九三六。
（七）『東京大学百年史』通史一、東京大学出版会、一九八四。
（八）「東京大学医学部生徒一覧表」『医学雑誌』四七号、一～五頁、一八七九。

（新潟大学医学部）